

◆あなたに語る・時代を超えて生きる心◆

特集展示「赤ってじつはどんな色?」に展示されている作品について勉強してみよう。

いまに感じる むかしの赤

みなさんは、赤色を見たとき、どんなイメージを持ちますか？
派手、情熱的、危険・・・人によって感じ方はさまざまだと思います。では、むかしの人はどうだったのでしょうか。どうやら、赤色に特別なパワーを感じていたようです。

【古墳から見つかる赤色】

日本では、3世紀半ばごろから7世紀ごろにかけて、古墳という土を高く盛った巨大なお墓がつけられました。古墳は、地域を支配したリーダーや、権力を持った人のためのお墓で、それを築くのは、たくさんのお金、人を使った一大プロジェクトだったのです。

その古墳からは、赤でかざったものがよく見つかります。たとえば、亡くなった人の眠るひつぎの内側が真っ赤に塗られていることがあります。また、古墳の上には、はにわという円柱や人や動物のすがたのやきものが並べられましたが、人型のはにわには、図1のようにおでこや頬のところに化粧のような赤い線がついている例が見られます。

では、古墳で見つかる赤色には、いったいどのような意味があったのでしょうか。じつは、はっきりとした答えはわかっていません。ひとつには、外から入ってくる悪霊を追いはらう役割があったといわれています。また、亡くなった人の生き返りを願ったのだらうと考える人もい



図1 埴輪 帽子をかぶった男子 出土地不明 古墳時代（6世紀） 京都国立博物館蔵

ます。きっと、人間にはどうすることもできない願いを赤色にこめたのでしょう。

【朱漆塗のうつわ】

朱漆とは、うるしという木から採れる液体に、赤い材料をまぜたものです。これを器の表面に塗ることで、つやのある美しい赤色の器ができあがります。なんと、今から約6000年前にはこのような朱漆塗の器がつくられていたようです。

神社やお寺では、さまざまな大きさや形をした朱漆塗の器が使われていました。図2の器は高杯たかつきといって、ひとり用の食事をのせる足付きのお膳ぜんです。もともと奈良県のおおみわじんじや大神神社に伝わったもので、14世紀ごろにつくられました。神さまにお供えそなものをするための道具だったのでしょう。

朱漆を塗った高杯は、神社やお寺だけではなく、宮中や貴族のお屋敷やしきでも使われていました。実際に古代の貴族が使ったとされる品は伝わっていませんが、12世紀につくられた絵巻物えまきでは、貴族が宴会えんかいをしている場面で、ごちそうが朱漆を塗った高杯の上えがののっているところが描かれています。人間用とはいえ、朱漆が塗られた器は特別なときに使われたのですね。

その朱漆にまぜる材料のひとつに朱があります。朱は、辰砂しんしゃという石を細かく砕いたり、人工的に水銀と硫黄を混ぜたりしてつくります。朱は手に入れるのがむずかしく、とても貴重な材料でした。そのため、朱漆を塗った器は神さまや高貴な人のものとされたのです。

展示室にはほかにも、全身が真っ赤に塗られた仏さまの絵や、お芝居で鬼や精霊の役がつける赤いお面おにがあります。赤を塗ることで、人間をこえた特別なものを表現しようとしたのかもしれませんが。いまの時代まで伝えられた作品をじっくりと見て、そんなむかしの人々の感覚に少しだけ近づいてみてください。きっと、赤色のイメージが深まるのではないのでしょうか。

(教育室 安部真里奈)



図2 朱漆塗高杯 鎌倉～南北朝時代（14世紀） 京都国立博物館蔵